

のサンプル点数), 三次元のベクトル波解析の場合は $4N+2$ となる. そこで三次元のビーム伝搬法においては次のような対策がとられる.

- 演算子分割の一手法である ADI 法 (Alternating Direction Implicit: 交互方向陰的差分法) を用いて, バンド幅 3 の連立一次方程式を多数回解くことに帰着させる. こうすると, トーマスアルゴリズムを用いることができるので, 計算は高速になる.
- 連立一次方程式を解く方法として, ガウスの消去法ではなく, 反復法を用いる. 共役勾配法 (Conjugate Gradient Method) の一種である Bi-CGSTAB 法 (安定化双共役勾配法) がよく用いられている.

「スカラ波解析」と「セミベクトル波解析」の違いは, 屈折率の微分項が入ってくるか否かである. 5.6 節 (p.116) で述べたように, 屈折率の微分項を差分で表現する場合, 離散化の際に注意を要する.

セミベクトルの定式化における E_x は

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \right) E_x + \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{1}{n^2} \frac{\partial (n^2)}{\partial x} E_x \right) + k_0^2 n^2 E_x = 0 \quad (5.43)$$

であり, 左辺第二項に要注意である.

三次元のフルベクトル BPM の論文^[27, 28]では式 (5.43) の左辺第二項を以下のように離散化している. なお, $n^2 \rightarrow \varepsilon$, $E_x(x - \Delta x, y, z) \rightarrow E_-$, $E_x(x, y, z) \rightarrow E$, $E_x(x + \Delta x, y, z) \rightarrow E_+$, $\varepsilon(x - \Delta x, y, z) \rightarrow \varepsilon_-$, $\varepsilon(x, y, z) \rightarrow \varepsilon$, $\varepsilon(x + \Delta x, y, z) \rightarrow \varepsilon_+$ と表現している.

$$\frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{1}{\varepsilon} \frac{\partial \varepsilon}{\partial x} E_x \right)$$

屈折率の微分は差分で表現し, その他の項は平均をとる

$$\begin{aligned} &\Rightarrow \frac{1}{\Delta x} \left\{ \frac{1}{\frac{\varepsilon_+ + \varepsilon}{2}} \frac{\varepsilon_+ - \varepsilon}{\Delta x} \frac{E_+ + E}{2} - \frac{1}{\frac{\varepsilon + \varepsilon_-}{2}} \frac{\varepsilon - \varepsilon_-}{\Delta x} \frac{E + E_-}{2} \right\} \\ &= \frac{1}{(\Delta x)^2} \left\{ \frac{\varepsilon_+ - \varepsilon}{\varepsilon_+ + \varepsilon} (E_+ + E) + \frac{\varepsilon_- - \varepsilon}{\varepsilon_- + \varepsilon} (E + E_-) \right\} \\ &= \frac{1}{(\Delta x)^2} \left\{ \frac{\varepsilon_+ - \varepsilon}{\varepsilon_+ + \varepsilon} E_+ + \left(\frac{\varepsilon_+ - \varepsilon}{\varepsilon_+ + \varepsilon} + \frac{\varepsilon_- - \varepsilon}{\varepsilon_- + \varepsilon} \right) E + \frac{\varepsilon_- - \varepsilon}{\varepsilon_- + \varepsilon} E_- \right\} \end{aligned}$$

式 (5.43) の左辺第一項と合わせて,

$$\begin{aligned} &\frac{\partial^2 E}{\partial x^2} + \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{1}{\varepsilon} \frac{\partial \varepsilon}{\partial x} E_x \right) \\ &= \left\{ \frac{2\varepsilon_+}{\varepsilon_+ + \varepsilon} E_+ + \left(\frac{\varepsilon_+ - \varepsilon}{\varepsilon_+ + \varepsilon} + \frac{\varepsilon_- - \varepsilon}{\varepsilon_- + \varepsilon} - 2 \right) E + \frac{2\varepsilon_-}{\varepsilon_- + \varepsilon} E_- \right\} \frac{1}{(\Delta x)^2} \end{aligned}$$

5.9.2 ADI 法

ここからは三次元導波路のビーム伝搬法として式の形がもっとも簡単なスカラ波動方程式を扱う. 三次元のスカラ波動方程式は以下の形をしている.

$$\frac{\partial^2 E}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 E}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 E}{\partial z^2} + k_0^2 n^2 E = 0$$

これまでと同様に, $E = F e^{-j k_0 n_r z}$ において代入し, $\frac{\partial^2}{\partial z^2}$ の項を無視すると, F も z の関数. $\frac{\partial^2}{\partial z^2}$ の項を無視しない? (5.44) パラメータに注.

$$j 2 k_0 n_r \frac{\partial F}{\partial z} = \frac{\partial^2 F}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 F}{\partial y^2} + k_0^2 (n^2 - n_r^2) F$$

という近軸式が得られる. 式 (5.44) を素直にクランク・ニコルソン法で差分化すると, 図 5.17 のように 10 点の関係を表す差分方程式になる. 図 5.18 のように x 方向に M 個のサンプル点, y 方向に N 個のサンプル点をとる場合を考える. クランク・ニコルソン法で定式化し, 図 5.18 のようにサンプル点の番号をつけると, 未知数 $M \times N$ 個, バンド幅 $2N+1$ 個の連立一次方程式が得られる.

二次元のときはバンド幅が 3 であったので, トーマスアルゴリズム (ガウスの消去法において必要な部分だけを計算する方法) を用いて高速に解くことができたが, この場合はバンド幅が $2N+1$ となり, ガウスの消去法では非常に時間がか

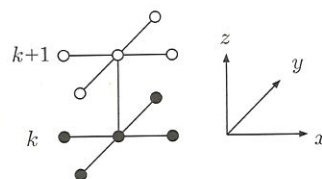


図 5.17 サンプル点の位置関係

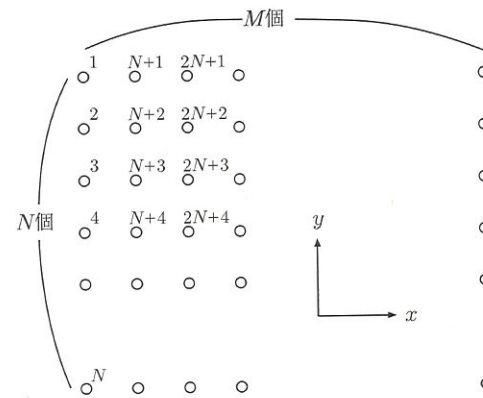


図 5.18 サンプル点番号

「Solving Direction Implicit」交互方向的差分法^[20~32]が用いられる。ADI法は「コーディングが容易である」「収束判定基準を定める必要がない」「高速である」という特長をもっているため、一番ポピュラーな方法である。

ADI法は演算子を分割し、2ステップに分けて解く方法である。演算子を分割することにより、バンド幅3の連立一次方程式を複数回解く問題に帰着させることができる。こうすると、トーマスアルゴリズムを用いることができるので計算は高速になる。

式(5.44)において、 $D_{xx} = \frac{\partial^2}{\partial x^2}$, $D_{yy} = \frac{\partial^2}{\partial y^2}$, $\nu = k_0^2(n^2 - n_r^2)$ という記号を導入し、 z 方向にクランク・ニコルソン法を用いて離散化する。 z 方向の離散点番号を k とすると、ステップ k とステップ $k+1$ の間の関係は

$$j2k_0n_r \frac{F^{k+1} - F^k}{\Delta z} = (D_{xx} + D_{yy} + \nu) \frac{F^{k+1} + F^k}{2} \quad (5.45)$$

移項して

$$\left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu)\right] F^{k+1} = \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu)\right] F^k \quad (5.46)$$

左辺を次のように近似して演算子を分割する。

$$\begin{aligned} & \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu)\right] F^{k+1} \\ &= \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+1} \\ & \quad - \left(\frac{\Delta z}{j4k_0n_r}\right)^2 \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right) \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right) F^{k+1} \\ & \simeq \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+1} \quad (5.47) \end{aligned}$$

無視した項(点線のアンダーライン)は Δz が小さくなるほど、小さくなる。右辺についても同様の操作を行い式(5.46)に代入すると、

$$\begin{aligned} & \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+1} \\ &= \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^k \quad (5.48) \end{aligned}$$

が得られる。移項して、次式が得られる。

$$F^{k+1} = \frac{\left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right]}{\left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right]} \cdot \frac{\left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right]}{\left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right]} F^k \quad (5.49)$$

点線のアンダーラインが引いてある部分を $F^{k+\frac{1}{2}}$ と置くと、次の二つの式が得られる。

$$\left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+1} = \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+\frac{1}{2}} \quad (5.50a)$$

$$\left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{xx} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^{k+\frac{1}{2}} = \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0n_r} \left(D_{yy} + \frac{\nu}{2}\right)\right] F^k \quad (5.50b)$$

式(5.50a)、(5.50b)を x, y 方向にも離散化して書き下すと、次のようになる。

$$\begin{aligned} & \frac{j4k_0n_r}{\Delta z} F_{ij}^{k+1} - \frac{F_{i,j-1}^{k+1} - 2F_{ij}^{k+1} + F_{i,j+1}^{k+1}}{(\Delta y)^2} - \frac{k_0^2(n^2 - n_r^2)F_{ij}^{k+1}}{2} \\ &= \frac{j4k_0n_r}{\Delta z} F_{ij}^{k+\frac{1}{2}} + \frac{F_{i-1,j}^{k+\frac{1}{2}} - 2F_{ij}^{k+\frac{1}{2}} + F_{i+1,j}^{k+\frac{1}{2}}}{(\Delta x)^2} + \frac{k_0^2(n^2 - n_r^2)F_{ij}^{k+\frac{1}{2}}}{2} \quad (5.51a) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \frac{j4k_0n_r}{\Delta z} F_{ij}^{k+\frac{1}{2}} - \frac{F_{i-1,j}^{k+\frac{1}{2}} - 2F_{ij}^{k+\frac{1}{2}} + F_{i+1,j}^{k+\frac{1}{2}}}{(\Delta x)^2} - \frac{k_0^2(n^2 - n_r^2)F_{ij}^{k+\frac{1}{2}}}{2} \\ &= \frac{j4k_0n_r}{\Delta z} F_{ij}^k + \frac{F_{i,j-1}^k - 2F_{ij}^k + F_{i,j+1}^k}{(\Delta y)^2} + \frac{k_0^2(n^2 - n_r^2)F_{ij}^k}{2} \quad (5.51b) \end{aligned}$$

式(5.51b)と式(5.51a)は6点の関係を示しており、図5.19の右側のような状況である。式(5.51b)と式(5.51a)の右辺はその時点で既知の値なので、バンド幅3の連立一次方程式を表している。

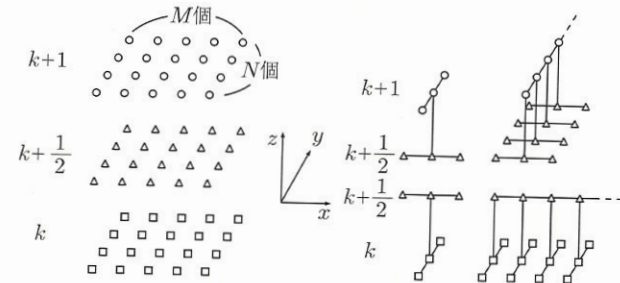


図 5.19 ADI 法

ステップ k からステップ $k+\frac{1}{2}$ の値を求めるには「未知数 M 個、バンド幅 3」の連立一次方程式を N 個解き、ステップ $k+\frac{1}{2}$ からステップ $k+1$ の値を求めるには「未知数 N 個、バンド幅 3」の連立一次方程式を M 個解けばよい。

ADI は、コーディングがやさしく収束について考える必要がないので、一番ポピュラーであると思われる。市販の三次元 BPM をサポートした光 CAD 製品は、ほとんどの製品が ADI 法を用いている。

ADI による三次元の差分 BPM は、法政大学の山内潤治先生によって 1991 年に発表された^[29]。法政大学の山内潤治先生の研究室は、北海道大学の小柴正則先生の研究グループと並んで、光導波路解析に関しては世界的に有名な研究室であり、気鋭の小柴純先生を擁して、1992 年頃以降、ビーム伝搬法に関する論文を多数発表している。

その山内先生の研究室の 2001 年春の電子情報通信学会の総合大会の発表^[33]によると、近軸式に基づいた三次元の差分 BPM の速度を ADI と反復法で比べたところ、同程度の精度で ADI の方が速いと報告されている。

次に ADI 法に対する Pade の適用について考える^[34, 35]。Pade(1,1) 近似を用いた三次元のスカラー波動方程式は次のようになる。

$$\frac{\partial F}{\partial z} = \frac{\frac{1}{j2k_0 n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu)}{1 + \frac{1}{4k_0^2 n_r^2} (D_{xx} + D_{yy} + \nu)} F \quad (5.52)$$

上式を z 方向にクランク・ニコルソン法を用いて離散化すると、

$$\begin{aligned} & \left[1 + \frac{1}{4k_0^2 n_r^2} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) \right] F^{k+1} \\ &= \left[1 + \frac{1}{4k_0^2 n_r^2} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) + \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) \right] F^k \end{aligned} \quad (5.53)$$

となる。ADI 法を用いて演算子を分割すると、式 (5.53) の左辺は

$$\begin{aligned} & \left[1 + \frac{1}{4k_0^2 n_r^2} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) \right] F^{k+1} \\ &= \left[1 + \left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{xx} + \frac{\nu}{2}) \right] \\ & \quad \times \left[1 + \left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{yy} + \frac{\nu}{2}) \right] F^{k+1} \\ & \quad - \underbrace{\left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} + \frac{\Delta z}{4k_0 n_r} \right)^2 (D_{xx} + \frac{\nu}{2}) (D_{yy} + \frac{\nu}{2}) F^{k+1}}_{\text{無視する項}} \end{aligned} \quad (5.54)$$

となり、無視する項 (波線のアンダーライン) の中の $\frac{1}{4k_0^2 n_r^2}$ の部分は Δz を 0 に近づけても 0 にはならない。

平面光導波路において、導波路の変位は水平方向 (ここでは x 方向) のみである。そこで、パデ式を水平方向にのみ適用する。式 (5.52)~(5.54) において、Pade(1,1) 近似によって生じた項のうち y 方向の微分項 (点線のアンダーラインがある項) を無視すると、以下のような演算子分割が可能となる。

$$\begin{aligned} & \left[1 + \frac{1}{4k_0^2 n_r^2} (D_{xx} + \nu) - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{xx} + D_{yy} + \nu) \right] F^{k+1} \\ &= \left[1 + \left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{xx} + \nu) \right] \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{yy}) \right] F^{k+1} \\ & \quad - \underbrace{\left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) \left(-\frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{xx} + \nu) D_{yy} F^{k+1}}_{\text{無視する項}} \end{aligned} \quad (5.55)$$

この場合、無視する項 (波線のアンダーライン) は Δz に対して一次であり、 Δz を小さくすると、小さくなる。式 (5.53) の右辺に対しても同様の演算子分割を施すと以下の式が得られる。

$$\begin{aligned} & \left[1 + \left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{xx} + \nu) \right] \left[1 - \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{yy}) \right] F^{k+1} \\ &= \left[1 + \left(\frac{1}{4k_0^2 n_r^2} + \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} \right) (D_{xx} + \nu) \right] \left[1 + \frac{\Delta z}{j4k_0 n_r} (D_{yy}) \right] F^k \end{aligned} \quad (5.56)$$

式 (5.49) と同様の変形を施すと、バンド幅 3 の連立一次方程式を多数回解く問題に帰着する。

本節では、三次元のスカラー波解析の ADI-BPM について述べた。セミベクトル波解析の ADI-BPM は論文^[36]、フルベクトル波解析の ADI-BPM は論文^[37, 38] で説明されている。

また、ここまでは差分 BPM についての話であった。有限要素 BPM^[12, 13] は差分に比べると、メッシュの取り方がより柔軟に行える利点がある。たとえば、図

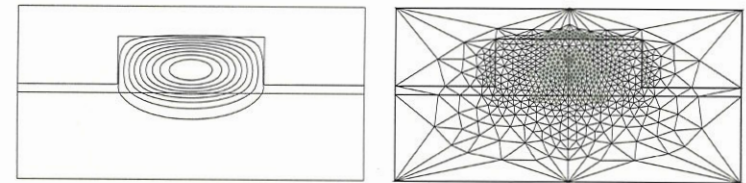


図 5.20 有限要素法によるメッシュ分割例

5.20 のようにフィールドの大きさや導波路の形状に応じて、メッシュの細かさを調節することができる。ただし、1 ステップの計算ごとに導波路のレイアウトに応じて、メッシュを自動生成するコードを開発する必要があり、コーディングの難易度はFD-BPM よりかなり高いように思われる。そのため、日本国内では三次元のFE-BPM (Finite Element Beam Propagation Method) は北海道大学の小柴先生の研究グループを除いては、どこもコーディングに成功していないようである。

5.10 ビーム伝搬法でモードを求める

ビーム伝搬法を使ってモードを求めることができる。本節の内容は、論文^[39]に基づいている。式を簡単にするため、 y 軸方向に一樣なスラブ導波路をTE波が z 軸方向に伝搬する場合を考える。電界 E_y を ϕ で表すと、 $\phi(x, z)$ は次式を満たす。

$$\frac{\partial^2 \phi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \phi}{\partial z^2} + k_0^2 n^2 \phi = 0 \quad (5.57)$$

$z=0$ に $\phi_{in}(x)$ を入射し、 z の正方向に計算を進める。 z の関数 $P(z)$ を次のように定義する。

$$P(z) = \int \phi_{in}^*(x) \phi(x, z) dx \quad (5.58)$$

上式はBPMで求めたフィールド $\phi(x, z)$ と入射フィールド $\phi_{in}(x)$ の相関を、各 z 位置で求めることにより、複素関数 $P(z)$ を作ることを意味している。 $P(z)$ は次のように変形することができる。

$$\begin{aligned} P(z) &= \int \phi_{in}^*(x) \phi(x, z) dx \\ &= \int \sum_n c_n^* \phi_n^*(x) \cdot \sum_m c_m \phi_m(x) e^{-j\beta_m z} dx && \text{入射フィールドとBPMフィールドを} \\ & && \text{モードで展開する} \\ &= \int \sum_m |c_m|^2 |\phi_m(x)|^2 e^{-j\beta_m z} dx && \text{モードの直交性により、異なるモード} \\ & && \text{の重なり積分は0になる} \\ &= \sum_m |c_m|^2 e^{-j\beta_m z} && \text{モードフィールドは電力が1に正規化} \\ & && \text{されていることを仮定する} \end{aligned} \quad (5.59)$$

以上のように $P(z)$ は $e^{-j\beta_m z}$ という因子を含んでいるので、フーリエ変換すると β_m の場所でピークをもつ。すなわち、 $P(z)$ をフーリエ変換することにより、初期フィールドに含まれているモードの伝搬定数 β_m を求めることができる。

モードの伝搬定数 β_m が求まったなら、モードのフィールド分布 $\phi_m(x)$ は次式で求めることができる。

$$\phi_m(x) = \frac{1}{L} \int_0^L \phi(x, z) e^{j\beta_m z} dz \quad (5.60)$$

その理由を以下に示す。

$$\begin{aligned} \frac{1}{L} \int_0^L \phi(x, z) e^{j\beta_m z} dz &= \frac{1}{L} \int_0^L \sum_n \phi_n(x) e^{-j\beta_n z} \cdot e^{j\beta_m z} dz \\ & \quad \begin{array}{l} n=m \text{ のとき } e^{-j\beta_m} e^{j\beta_m} = 1, n \neq m \text{ の} \\ \text{とき } e^{-j(\beta_n - \beta_m)z} \text{ だから、} m \text{ 以外の項は積} \\ \text{分すると平均されてほぼ0になる} \end{array} \\ &\simeq \frac{1}{L} \int_0^L \phi_m(x) dz \\ &= \phi_m(x) \end{aligned} \quad (5.61)$$

取り出したいモード以外の成分は、積分距離が長くなるほど相対的に小さくなる。しかし、距離が n 倍になっても相対的な大きさは $1/n$ にしか小さくならないので、モードを求めるには長い距離 (1000λ 以上) 伝搬させる必要がある。

5.11 虚軸ビーム伝搬法

5.3 節 (p.109) で、克蘭ク・ニコルソン法で定式化したBPMを用いて、等価屈折率 n_e のモードが伝搬する状況を解析した。 $F_i^{j+1} = \alpha F_i^j$ とおいて「 $\alpha =$ 」の形に変形すると、次の式を得た。

$$\alpha = \frac{j4k_0 n_r + \Delta z k_0^2 (n_e^2 - n_r^2)}{j4k_0 n_r - \Delta z k_0^2 (n_e^2 - n_r^2)}$$

等価屈折率 n_e のモードが伝搬するとき、 F_i^{j+1} と F_i^j は以下の関係がある。

$$\begin{bmatrix} F_1^{j+1} \\ F_2^{j+1} \\ F_3^{j+1} \\ \vdots \\ F_N^{j+1} \end{bmatrix} = \frac{j4k_0 n_r + \Delta z k_0^2 (n_e^2 - n_r^2)}{j4k_0 n_r - \Delta z k_0^2 (n_e^2 - n_r^2)} \begin{bmatrix} F_1^j \\ F_2^j \\ F_3^j \\ \vdots \\ F_N^j \end{bmatrix}$$

ここで、 $[F_1^j \ F_2^j \ F_3^j \ \dots \ F_N^j]^t$ などのベクトルは、等価屈折率 n_e のモードのフィールドパターンを表す。

いま、導波路中に放射モードと導波モードを含めて、複数のモードが励振されているとする。 i はモード番号を表す。モード番号 i の振幅を c_i 、等価屈折率を n_{ei} 、フィールドパターンを $[{}^iF_1 \ {}^iF_2 \ {}^iF_3 \ \dots \ {}^iF_N]^t$ と表すとき、1 ステップ後のフィールドパターン $[X_1 \ X_2 \ X_3 \ \dots \ X_N]^t$ は次式で表される。